

中学生の健康問題への関心と対処方法の実態調査

—中学生と教員の比較—

久米美代子 村山より子 小川久貴子

要旨：思春期のヘルスプロモーションに関する詳細調査を目的として、2001年は大東町の中学生766人を対象に健康問題への関心と対処方法の実態調査を行ない、2002年は大東町立中学校教員44名を対象に、中学生の健康問題への意識と課題を明らかにした。本年は、2001年と2002年の調査から健康問題の関心（生活・健康上の悩み、今知りたいこと）、対処方法（悩みの対処方法、相談相手に望む人）に焦点を当てて、両者間の相違の有無を検討した。さらに、学校における性教育の実態調査と性教育に関する教員の認識の聞き取り調査を行った。その結果、生活・健康上の悩みの項目では「アイデンティティ」・「学校生活」、今知りたいことと相談相手に望む人では中学生と教員間に有意差がみられた（ $p < 0.05$ ）。しかし、有意差のある項目は少なかった。これは、聞き取り調査から教員が日々生徒達と良く関わり、きめ細かく生徒たちを見ている結果ではないかと考える。さらに、聞き取り調査からほぼ全員の教員が性教育の重要性を感じていた。

I. はじめに

思春期は子どもから大人へと身体・精神が大きく変化する時期であり、その時の健康は将来にわたって大きく影響を及ぼす。特に、リプロダクティブ・ヘルスに関わる多くの問題は思春期におこる可能性が高いといわれている¹⁾。それは、思春期の子どもたちの知りたいと思う情報、特にリプロダクティブ・ヘルスに関する情報は入手しづらい環境にあるためと考える。

2001年に我々が調査した²⁾中学生の健康に関する情報源を見ると、身近なところにいる友人・雑誌・テレビなどのマスメディアが最も多かった。しかし、友人からの情報は聞きかじった内容であり正確さが危ぶまれる。また、マスメディアを媒体とした誤った情報はいたずらに子どもたちの不安を煽らせたり、悩ませる結果となっている。思春期を対象とした相談機関が不足している現在において、将来の子どもたちが健康を獲得するためには、まず身近にいる大人が、今子どもたちがどんな健康問題に悩み、どんな知識を知りたいと考えているのかを知る必要がある。

そして、子どもたち自身の性を含む健康問題への関心と対処方法を把握して中学生のニーズにあった健康教育、健康相談を行なう必要がある。そして、このためには大人が思っていることと、子どもたちが考えていることにズレがあるということ認識する必要がある。

そこで、本調査では、中学生の健康問題への関心と対処方法について、中学生と教員の調査からその違いを明らかにすることと教員への聞き取りから性教育のあり方を検討した。

II. 方法

1. 調査対象

1) アンケート対象

- ・大東町の中学生766名
- ・大東町中学校教員44名

2) 面接対象

- ・大東町中学校教員20名（男12名、女8名）

2. 調査方法と内容

1) アンケート調査の比較

2001年、中学生対象の調査と2002年、教員対象の調査から、健康問題への関心については、「生活・健康上の悩み」(①アイデンティティ、②学校生活、③体の変化・発達、④家族関係、⑤恋愛や性行動)と「今、知りたいこと」の2項目(詳細項目5)、その対処方法については、「悩みの対処方法」と「相談相手に望む人」の2項目に焦点を当てて、両者間の相違の有無を比較検討した。

2) 面接調査

研究同意が得られた各教員の都合の良い時間に、性教育に関する面接調査紙を基に個人面接を実施した。調査依頼は、大東町教育委員会と両中学校の校長先生、教頭先生、養護教諭に研究の趣旨を説明し許可を得て実施した。面接調査は本研究3名が行なった。

調査内容は、①教員の背景、②性教育研修会への参加意識、③教員が受けた性教育、④性の相談や授業で困ったこと、⑤今後の性教育への要望の5項目行なった。それを、カテゴリーに分類した。

2. 倫理的配慮

調査依頼にあたっては、大東町教育長と両中学校校長および養護教諭に研究の趣旨を十分説明し、調査結果の匿名性の保持、調査に同意しないことにより不利益をこうむることがないことを約束した。

Ⅲ. 結果

1. 調査対象者の背景

1) アンケート対象者 (表1)

中学生は766名であり、その内訳は、1年生254名、2年生258名、3年生254名で、教員は44名であった。

表1 アンケート対象者の背景

	男 (人)	女 (人)	合計 (人)
中学生	399	367	766
1年生	140	114	254
2年生	132	126	258
3年生	127	127	254
教員	26	18	44

2) 面接対象者の背景 (表2)

男性教員12名、女性教員8名の計20名で、年齢は、20～50歳代にわたっていた。担当教科は保健体育4名、数学・理科各3名、養護教諭・技術家庭・国語・社会・英語が各2名であった。また、クラス担任をしているのは7名で、性教育の研修会に参加したことのある教員は9名であった。

表2 面接対象者の背景

項目	人数(人)
性別	
男	12
女	8
合計	20
年齢	
20代	1
30代	5
40代	7
50代	7
担任学級の有無	
有	7
無	13
担当教科	
保健体育	4
養護	2
数学	3
英語	2
国語	2
理科	3
社会	2
技術家庭	2
研修会参加の有無	
有	9
無	11

2. 健康問題についての比較

1) 生活・健康上の悩みに関する比較

① アイデンティティに関する比較 (図 1)

中学生は、「感情の揺れ」27.9%、「自分の性格」26.8%、「自分がわからない」21.8%という3項目にはあまり差はみられなかった。しかし教員のほとんどは感情の揺れ 82.0%と回答しており、教員が有意に高かった ($P<0.05$)。

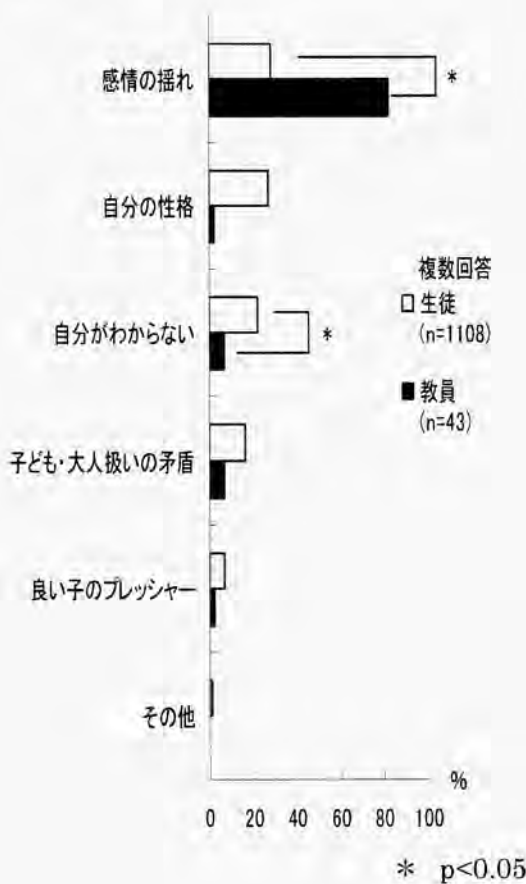


図 1 アイデンティティに関する比較

② 学校生活に関する比較 (図 2)

生徒は、「成績や進路の不安」52.0%、「友達付き合いが下手」17.6%、「部活の悩み」13.8%、「学校に行きたくない」9.8%、「いじめにあった」3.7%であった。教員は「友達付き合いが下手」64.0%と一番多く、次に「成

績や進路の不安」18.0%、「学校に行きたくない」10.0%、「いじめにあった」8.0%であった。成績や進路の不安は生徒が有意に高く、友達付き合いが下手に関しては教員が有意に高いという結果であった。 ($P<0.05$)。



図 2 学校生活に関する比較

③ 体の変化・発達に関する比較 (図 3)

「容姿に関すること」では、生徒 50.4%、教員 82.0%と一番多かった。次に、「身体の発育の個人差」で生徒は 26.6%、教員は 18.0%であり、これらの項目は生徒と教員では同じ傾向の回答であった。



図3 体の変化・発達に関する比較



図4 家族関係に関する比較

④ 家族関係に関する比較 (図4)

家族関係の中では、「親との関係が一番多く、生徒65.5%、教員93.0%であり、次に、「両親の喧嘩や離婚・再婚について」、生徒65.5%、教員7.0%であった。これらの項目は生徒と教員では有意差が見られなかった。

⑤ 恋愛や性行動に関する比較 (図5)

「恋愛関係」が一番多く、生徒57.3%、教員92.0%、次は、「性体験」であり、生徒12.5%、教員6.0%、「キス」の項目では、生徒10.3%、教員3.0%であった。

恋愛や性行動に関する比較ではどの項目においても両者間に有意差は見られなかった。



図5 恋愛や性行動に関する比較



図6 今、知りたいことに関する比較
*p<0.05

2) 今、知りたいこと (図6)

生徒は、「ストレス解消」25.2%、「人間関係」19.1%、「人生や生き方」17.7%、「ダイエット」14.8%、「異性との付き合い方」10.7%の順であった。一方教員は、「人間関係」25.0%、「異性との付き合い方」17.2%、「人生や生き方」15.5%、「ダイエット」15.6%の順であった。

両者間に有意差があったのはストレス解消法で有意に生徒が高かった (p<0.05)。

3) 悩みの対処方法に関する比較 (図7)

悩みの対処方法では、生徒は「同性の友人と話す」28.8%、「一人で悩んだ」13.8%、「じっと我慢した」13.8%、「家族に八つ当たり」10.6%、「家族と話す」10.3%の順であった。教員は、「同性の友人と話す」37.1%、「一人で悩んだ」14.6%、「携帯電話で話す」13.5%、「家族に八つ当たり」9.0%、「じっと我慢した」9.0%の順であった。

悩みの対処方法の選択肢の1位、2位は生徒、教員ともに「同性の友人と話す」、「一人で悩んだ」であった。3位以下の順位は各々異なっていたが、各項目ともに両者間の有意差は認められなかった。

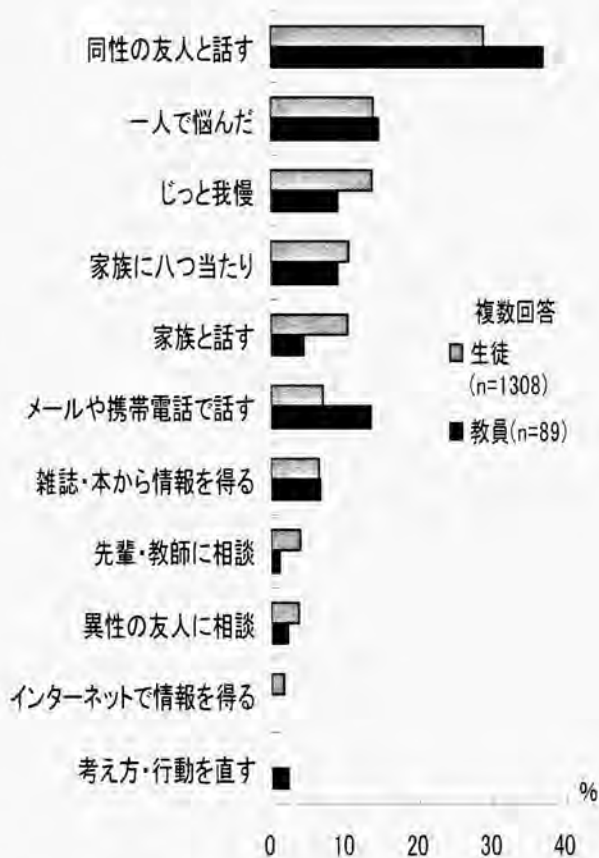


図7 健康問題への対処に関する比較



図8 相談相手に望む人の比較

4) 相談相手に望む人の比較 (図8)

一番相談相手に望むのは両者ともに「相談しやすい友人」で、生徒 68.0%、教員 44.0%、次に、「自分を理解してくれる人」で、生徒 62.3%、教員 29.3%であり、この2項目の順位に差は見られなかった。しかし、「自分を理解してくれる人」では生徒が有意に高く、「親」に関しても値は低いながらも生徒が有意に高かった。一方、「養護教諭」に関しては教員が有意に高かった ($p < 0.05$)。

2. 健康問題 (性) に関する聞き取りから

1) 性教育研修会への参加意識 (表3)

研修会の主催は、静岡県・中部教育事務所・養護教諭中部研修会・校内などであり、養護教諭、保健体育の教員の参加が多かった。研修会で学んだことは、生徒への個人指導、教員への対応、学級活動、授業、保護者の相談へ活用していた。

参加しなかった理由は、他の研修会との重なりをあげていたが性教育の研修会参加の必要性はあると答えていた。その理由として、性交の低年齢化、性モラルの低下から性教育の必要性を感じるが性教育を行う自信が無いので参加したいであった。

表3. 性教育研修会への意識

項目	主な意見内容および人数(人)
参加した時期	・毎年、今年、4年前、7年前、10年前、15年前、17年前(各1)
主催者	・養護教諭中部研修会(2) ・中部教育事務所(2) ・静岡県(2) ・校内(2) ・他(1)
役に立った 主な内容	・性感染症について ・思春期の心身の変化(女子・男子の違い) ・性教育の方法 ・避妊方法 ・カウンセリングテクニック ・人工妊娠中絶の恐ろしさについて
参加しなかった 理由	・研修会日時が合わなかった(9) ・性教育研修会より参加したい他の研修会があった(1) ・不明(1)
研修会の必要性	・参加の必要性を非常に感じる(2) ・研修会での事例などは保健体育の授業に役立つので必要 ・性モラルが低下して性非行が田舎でも問題になっているので生徒指導に自信をつけたいので是非参加したい ・多数の女子高校生が性交経験者という現状を考えると必要 ・性教育は範囲が広く、発達段階にそって教育していく必要があるのに、現在は学級時間・保健の時間が少ないので ・校内での勉強会が必要 ・若い先生方に必要 ・性の低年齢化があるので、生徒指導を含めた研修会が必要 ・大切さはあるが、参加した後の生徒に対する指導に自信がないので必要かどうか分からない ・養護教諭に任せているので必要性を感じない ・今までのような、通り一面の研修会内容だと参加の必要性がない ・研修会に期待していないし、興味がないので必要がない ・性に関して情報があっても自分のこととしては消化できないので参加したくない

2) 教員の受けた性教育 (表4)

小学校～大学までで性教育を受けたことがない教員は約半数であった。受けたことがあると答えた教員の内容は、「女子を対象とした初潮教育」、「生命の大切さ」、「第2次性徴」、「避妊」であった。

家庭での性教育については、殆どの教員は受けた記憶が無いと答えていた。全員に共通していえることは満足した性教育は受けていないということである。

表4. 教員の受けた性教育

項目	内容および人数(人)
家庭や学校教育 で受けた性教育	・習った記憶がない(9)
	・家庭では習わなかった(17)
	・小学校で、女子だけの初潮教育だけ習った(8)
	・中学校で、生物学的受精や第2に性徴について男女混合で習った(5)
	・中学で、避妊の仕方までを具体的に物品を見て習った(1)
	・高校で、避妊を含めた内容をならった(2)
	・大学で、発達心理学の授業の中で習った(2)
	・大学で、生物学の授業の中で習った(2)
	・母親から習った(3)

3) 性の相談や授業で困ったこと (表5)

「困った経験がない」は11名であったが、30歳代の5名の教員は「自分自身の羞恥心があり生徒に話すことは恥ずかしい」と答えていた。また、現在のように学級活動の一環とした性教育では集団としての教育になってしまい生徒の個人差を考慮した指導ができないので困っていると指摘している教員も4名いた。

表5 性の相談や授業で困ったこと

主な意見内容および人数(人)
・困ったことはない(11)
・自分自身に羞恥心があり、語る事が恥ずかしい(5)
・現在のような学級活動の一環とした性教育では集団指導になり、個人差がある時期ゆえに難しい(4)
・時間がとれないため具体的なことができない
・性教育は本来どこの領域できちんと押さえるべきか検討の必要性を感じている

4) 今後の性教育への要望 (表6)

「学校がすべてではなく、小さい頃から折に触れやるべきである。親に情報を流し、啓蒙できる場所や指導がほしい」として、家庭での性教育を訴えている教員が7名いた。次に「カリキュラム改正で授業時間が削減されており、学級活動の一環としての性教育は現在のままでよいと思うが他にもやるが多すぎる」、「技術家庭科、保健体育の時間は現状のままにして性教育を行ってほしい」など各教員間の調整を望んでいる者は4名いた。

性教育をよりよいものにするためには、「理想的に積み上げたカリキュラムが必要であり、そのためには性教育の系統だったテキストや資料が欲しい」は4名であった。

「教員が授業を担当するよりは、専門性のある外部講師をたのむことも今後必要」3名。「研修会は事例や指導方法が実際にわかる内容が欲しい」3名。また、「人間の生き方を含めた性教育の必要性」3名であった。

表6 今後の性教育への要望

主な意見内容および人数(人)
・学校がすべてではなく、家庭で親が性教育を伝える教育(7)
・カリキュラム改正により授業時間が減り、益々性教育に当てる時間が少なくなっているため、もっと時間がほしい(6)
・現状では各教員・各教科での調整不足である(4)
・理想的には積みあがったカリキュラムが必要であり、そのための系統だったテキストが欲しい(4)
・専門的な話を取り入れるために、今後は外部講師依頼(3)
・事例に富んだ、指導方法がわかる研究会が必要(3)
・性教育に限局せず人間としての生き方を深められる教育(3)
・刺激的な広告などの情報氾濫により、生徒の性に歯止めが利かなくなりそうなのでその対策が必要である(2)
・相談に来ない生徒へのフォロー体制づくり
・生徒に正しい知識を与え、自ら選択できる能力を養う教育体制
・養護教諭としては、チームティーチングとして学級活動に参加する体制づくり、その際には「男女のよりよい関係のあり方」、「性被害」、「生命の誕生」をとりあげたい
・父母にも教える機会を設けたい

VI. 考察

1. 健康問題の関心について

1) 生徒の悩み

生活・健康上の悩みの内容の項目別で教員と比較をすると、生徒は「アイデンティティ」、「学校生活」に関する項目が有意に高く、他の「身体の変化・発達」、「家族関係」、「恋愛や性行動」に関する項目については有意差は見られなかった。このことは、アイデンティティは自分の性格や感情の部分であり、生徒が自分の中で考え、行動を起こす部分でもある。また、学校生活に関しては、成績や進路の不安、友人関係の下手さについて悩むことが多く、できたら生徒自身が自分の中で解決したいと考える内容である。つまり、アイデンティティや友人関係のような、あまり教員に知られたいくない部分は日常生活では表面だけ見えないことが教員との差となって現れたのではないかと考える。

「体の変化・発達」、「家族関係」、「恋愛や性行動」に関して両者間に有意差が見られなかったのは、社会的に思春期特有の問題として取り上げられている項目であり、中学生の悩みとして外すことができないものである。以上から考えると、生徒と教員で差が見られないのは当然と考えられる。さらに、これらについては、生徒は教員に良く相談している内容であるのか、それとも先生方が気にかけて生徒にかかわっている内容と言うことも考えられる。生徒とかかわる時間が取れないとジレンマを感じている教員もあったが、多くの教員は日々生徒達と良く関わり、きめ細かく生徒たちを見ている結果ではないかと考える。

さらに、今知りたいことについて内容項目別比較では、生徒は「ストレス解消法」、「人間関係」、「人生や生き方」を知りたいと思っていた。そのなかでも群を抜いて「ストレス解消法」を望んでいることは、日頃からかなりのストレスを感じていると考えられる。

小学生という小地域の行動範囲から中学生になると教校が一緒になり中学生生活の地域拡大があり、行動範囲が広がる。それに伴い、人間関係の複雑さや子どもから大人にならなければならないという葛藤などそこには多くのストレスが考えられる。しかし、教員は「人間関係」、「ダイエット」、「異性との付き合い方」をあげているが中学生の知りたい情報はもっと奥深いものがあるように思える。

2) 対処方法

生活・健康上の悩みに対する対処方法の比較では、生徒も教員も一番多いのが同性の友人であった。加藤³⁾らも身近にいる友人が情報源であり、友人などの場合は、聞きかじった知識を振り回している場合が少なくない、必ずしも問題解決がはかられるとはいえない。また、マスメディアからの情報には、いたずらに不安を煽るものや誤ったものであったりするなど、子どもたちを悩ませる結果となっていると報告している。本調査ではマスメディアからの情報より「一人で悩んだ」、「じっと我慢」している、「家族に八つ当たり」などが多いことから、健康問題への対処方法として、もう少し中学生のニーズに答えられるような相談窓口などの必要性も考えられる。

さらに、相談相手に望む人の比較からは、健康問題の相談相手は両者ともに「友人」、「理解してくれる人」が最も多かった。相談相手には、生徒は「理解してくれる人」や「親」が有意に高く、教員では「養護教諭」が有意に高かった。しかし、教員からの調査では⁴⁾、生徒からの相談には、学級担任が比較的多く受けている実状があった。その相談内容は「アイデンティティ」に関する問題よりも「恋愛感情」が主であった。たまに、深刻な問題（長い相談時間を要する。又は教員と生徒間だけでは解決できないような問題）の相談もある。その一方、教員の中には日々の業務に追われ、なかなかゆっくりと生徒の相談

に乗ることが出来ないジレンマを感じている実状があった。

2. 健康問題（性教育）に関する聞き取りから

性の問題は表面化せず明るく男女協力的な生徒たちであっても、マスメディアなどからの情報が氾濫している。また、家庭・社会教育力の低下等から性モラルの今後一層の逸脱が考えられるので性教育は必要性であると考えている教員が多かった。しかし、性教育を受けたことが無く、性教育研修会参加も少ないので性教育に自信のなさが感じられた。

現在の調査した中学校では、性教育の授業は年2回学級担任が行っている。また、保健体育では1年次「第2次性徴」、2年次に「HIV」、他には「喫煙問題」「薬物問題」がある。家庭科の教員は「夫立会い分娩のビデオや中絶の新聞記事を教材にした」授業をしている。また、養護教諭は林間学校前に初潮の話だけで、結局、性教育に関する授業は、「保健体育」、「学級活動」「生物」、「家庭科」、「養護教諭の林間学校、夏期休暇直前指導」の5領域にまたがり行われている。しかし、養護教諭の作成した性教育授業年間予定案はあるが各担当者が把握していないことも考えられる。さらに、担当者間の話し合いや調整が十分にされていないのが現状であった。

V. おわりに

思春期にある中学生の健康問題は一生を通して考えると人生の基盤になる時期である。体・心と健全な成長発達を遂げられるよう子どもたちをサポートをする取り組みが必要である。

今までのわれわれの調査結果からも「友人」、「親」、「教員」が重要な位置にあることが明らかになっている。今回の教員の聞き取り調査でも殆どの教員が性教育の必要性を認めている。

しかし、性教育を受けたことのない教員が多くその指導に戸惑いを感じていることも明確となった。よりよい性を含めた健康教育を行う

ためには、子どもたちのニーズを正確に知る必要がある。そのニーズを知った上で、家庭・学校・地域と連携し、中学生の健康問題を解決するためのシステムを構築することが必要であろう。特に情報の入手しづらいリプロダクティブ・ヘルスに関する正確な情報は、子どもたちが必要な時に自由に入手できるようにしたいものである。

謝 辞

本研究にご協力いただきました中学生、教員の皆様に心からお礼申し上げます。

参考・引用文献

- 1) 健やか親子 21 検討会：健やか親子 21 検討会報告書,母子保健 2010 年までの国民運動計画,2000.
- 2) 村山より子,小川久貴子,久米美代子:中学生の健康問題への関心と対処方法の実態調査,平成 13 年度大東町健康調査報告書,25-32,2002.
- 3) 加藤則子,北村邦夫,望月友美子,大井田隆:全国における思春期外来ならびに思春期相談窓口の設置状況に関する調査結果,思春期学会,21(3),283-290,2003.
- 4) 小川久貴子,村山より子,久米美代子:中学生の健康問題への意識と課題の実態調査,平成 14 年度大東町健康調査報告書,1-7,2003.